様式（第３条関係）

東京都北区とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	東京都北区赤羽 3-23-7
園　名	岩淵保育園

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

・身近な自然に興味を持つ
・遊びの中に自然物を取り入れ、五感や発想が豊かになる

＜テーマの設定理由＞

園の園庭や、近隣の土手や公園などが多くあり、身近に自然を感じやすい環境である。目に入るものに興味を持ち、友達や保育者に知らせ共有することを喜んでいた。そこから徐々に草花を収集したり、名前や色、形に興味を持ったりする姿が増えてきたためこのようなテーマとした。

２．活動スケジュール

・春：土手や公園内での探索を楽しみ、発見した植物を観察したり調べる。
　　収集した物は子ども達が遊びに取り入れていく様子を見守り、更にその世界が広がっていくようなものを準備する。
・夏：水遊びや泥遊びなどの感触遊びをしたり、植物での色水遊びを楽しむ。
　　栽培した野菜を観察して絵を描いたり、野菜スタンプや食育活動を行う。
　　飼育している生き物を観察し製作遊びを楽しむ。
・秋：落ち葉や枝を拾ったり、形や色の違いに気付く。見立て遊びからごっこ遊びへと発展し、友達とのやり取りの中でさらに遊びが広がっていく。
・冬：枯葉や雪、霜柱などに興味を持って触れたり観察したりする。新しい栽培物を通して、変化に気付いたり、身近な食材の生長に関心が高まる。

３．活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

・紙粘土　・絵の具　・折り紙　・画用紙　・食紅　・ブックカバー　・花紙
・栽培の土と苗と種　・飼育用の土　・カブトムシのエサ　・戸外で使える図鑑

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

①草花を収集し、ままごと遊びをする。
→紙粘土と組み合わせてパンやケーキ作り・枝を使用して焼き芋、BBQ ごっこ
　長い根っこを人参に見立て、大きなかぶの絵本をモチーフにごっこ遊び
②生き物の飼育を通じて生態や形の特徴に興味を持つ
→幼虫からそだてたカブトムシが成体となり、毎日餌をあげそれを食べている様子を
　観察する。トイレットペーパーの芯や折り紙を使って製作遊びで表現する。
③栽培物を育て、水やりや成長の観察をする
→毎日水やりをしながら違いに気付いたり、花の色、大きくなっていく様子に興味を持つ。
　できた野菜を観察して絵をかいたり、食育活動として給食で食べる
④夏の感触遊びを楽しむ
→食紅を使った色水や植物を使った色水などで見立て遊びごっこ遊びを楽しむ
　泥や水など身近な物を使って、その動きや感触、温度に興味を持つ
⑤雪を観察する
→雪を観察したり、実際に触れて遊ぶ事で温度や感触に気付く

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

①　・草花がある季節には自分たちでビニール袋を持って散歩に出かけ、収集を楽しんでいた。ベンチなどに並べ、「これはごはんです」「ケーキを作ったから食べてみて」とやり取りが始まっていく。散歩の度に繰り返し楽しみ、収集したものを「飾りたい」「本物のケーキみたいにしたい」という言葉が聞かれた。そこで紙粘土と紙皿を用意し、自分たちで見つけた草花や枝、木の実と組み合わせてケーキ・パン作りが始まった。明確にイメージを持って作成する児もいれば、作り始めてから徐々に何かの形になり、そこからイメージを膨らませている姿もあった。また、色や形の組み合わせにも気をつけていた。作成して数日間飾っていたところ､徐々に色が変わり変化にも気づくきっかけとなった。
・秋には落ち葉集めをして色や形の違いを観察する。そこで、遠足の際に落ち葉や枝を集め視覚化できるようにブックカバーに枠を付けて貼り付け収集できるようにした。好きな色、形で集めたり、すべて異なる物を集めたりと「ここがちがうね」「これは同じ！」具体的目で見て比較ができることで図鑑などで調べる活動に繋がった。
・根っこを引っ張っての大きなカブごっこでは、公園で見つけた物を数名が引っ張り始めたところからスタート。自分たちで枝を持って来て根っこの周りを掘ってみようとしたり、友達を呼び集め連なって引っ張ることも楽しんでいた。色がオレンジであることに気付き､「人参じゃない？」と言い始める。中身をよく見て見たら？と声をかけると「人参の中はオレンジだけどこれは違う！」と違いに気付き、木の近くにあったから根っこだねという気付きにつながった。

②　・幼虫期から土を変えて、観察する日々を過ごし成体になるところまで観察することができた。成体になってからは特に動きを見たり、拾った枝をカゴに入れてみるなどして関わりを持つ。成体に触れてみたりして、足の本数や口はどこか、羽はどうなっているか関心を持つことに繋がり、その姿からカブトムシの製作をして、具体的につのやなどを気に掛けながら取り組んでいた。

③・栽培物は土づくりから始まり、ミミズは土をよくしてくれること、根っこと幼虫は野菜が育ちにくくなるから取ること、種まき、苗を植えるところから芽が出た事や葉っぱがでたことを喜んで観察していた。「葉っぱは２枚なんだね」「ギザギザしてるね」「花の色が白だった！」など気付いたことを保育者や友だちと共有していた。収穫する際には土のにおいや感触に気付いているようだった。

・野菜が育っていく様子を観察する中で、「中はどうなってるかな？」「もう赤くなってる？」と疑問を持ち始める。また「トマトの絵描いた！」と遊びの中で野菜の絵を描く児が増えていく。そこでひとつ収穫し、保育者が切って中を見せると「描いてみる！」と絵の具の欲しい色を保育者に伝え画用紙に好きなように書いてみることを楽しんでいた。

④・夏の感触遊びでは園庭の泥、砂に水を組み合わせて形を変えたり団子などを作って見立て遊びをする。感触を楽しむ中で、泥が乾燥すると色が変化することなどにも気付く。また水単体ではといに流して、傾斜を変えて速さの違いを見たり、玩具を流して流れやすいものと止まってしまうものの違いにも興味が向いていた。

色水を使った遊びでは食紅、花紙、植物を使ってみる。花紙では一度水に溶かし、それらをざるにあげて片付けていると、「乾かしたらどうなるの？」と疑問を持つ。実際に乾かすと色が混ざった新しい紙になることにも気付くことができ、それらを使ってアイスクリームの製作遊びにも繋がった。

⑤・冬になると水が冷たくなる事に気づき、触ってみたりと季節による違いを体感する。

実際に雪が降り積もると、それらを集めて遊び「硬い所がある！」「ツルツルになってきた」「水になっちゃった」と実際に触れたからこその気付きを多く得ていたようだった。

５．振り返り

＜振り返りによって得た職員の気づき＞

身近にある自然に興味を持ち、最初は収集するところからのスタートだったが、徐々に三歳児らしい見立て遊び、ごっこ遊びへと発展していく様子が見て取れた。遊びの中で出てきたイメージを形にできるように、子ども達のつぶやきから教材や道具の準備をし、それがさらに製作遊びへと繋ぐことができた。このことからも、気付きやつぶやきを拾いながら共有したり、問い掛けをする事、思っていることを丁寧に読み解くことが保育者の援助として改めて重要だと感じた。また、このような援助をしていくことで、子ども達の遊びの継続性や、発想をさらに豊かにしたり、「こうしてみよう！」と考えること、「なんでこうなるんだろう？」と考えること、つまり探求心へと繋がることを実感した。

今回の気付きや、上手くいったこと等を次年度以降にも活用し、今後も園の特性を生かした形で自然に触れ、そこから探求心が高まるような活動を取り入れていきたい。